

今村和彦作 「受験1」

今村和彦ナレーション 去年のちょうど今ごろ、僕は、東京のとある予備校に、凍りつく寒さの中を、毎日通って  
いました。もう年も明け、どの顔も緊張のせいか皆こわばり、校内には殺気とも言える異様  
な雰囲気の流れていました。

予備校という世界は、点数が大きくものを言う世界でした。点数を余計に取った者が上のク  
ラスに行き、同じクラスでも点数の高い者は窓側に座る、という具合です。当然のことながら、  
皆は自分の点数だけではなく、他人の点数をも大いに気にするようになっていました。

効果音 (ガヤ)

今村 おーい、高橋じゃないか。ひどいな、無視するなんて。

高橋秀哉 なんだ、今村か。別に無視したわけじゃないさ。

今村 どうしたんだ？ えらく沈んでるじゃないか。葬式帰りみたいだぜ。もう少しまともな顔できね  
えのか？

高橋 この顔は地面<sup>じつら</sup>なんでね。あいにくだな。お前はいいよ。この前の模擬試験であんないい点  
数取ったもんな。お前には、今のおれの気持ちなんか分かるわけないさ。

今村 そんなに… 悪かったのか？

高橋 悪いなんてもんじゃない。もうメタメタさ。チェ、おれ、志望校落としたぜ。

今村 なんだって?! もう一度言ってみろ。お前、おれと一緒に大学に行こうって約束したの忘れた  
のか？

高橋 バカヤロー。「現実を見つめろ」って言ったのはお前じゃないか。お前はいい成績取ってい  
て、理想と現実がかみ合っているから、そのまま突っ走ればいい。だがな、おれはもう落ち  
るのがイヤなんだ。

今村ナレーション 僕はもう何も言えませんでした。僕には、彼の点数を上げてやることはできなかつたし、また  
“点数が足りなければ必ず落ちる”という現実の厳しさを骨身に染みて感じていたからです。  
「きっと大丈夫だよ」などと言う気休めも、白々しくて言えなかつたのです。

予備校はまさに競争の世界でした。“他人はさておき、自分が大学に入ってしまうれば勝ちな  
んだ”という価値観を持った学生が集まって、お互いにけん制しながらしのぎを削っている  
のです。僕もいつの間にかその価値観に毒されていたようです。そういえばこんなことがあ  
りました――。

伊藤由孝 いよう、今村！

今村 ん？ なんだ伊藤か。(賛美歌“立てよいざ立て“ハミング)

伊藤 えらい威勢がいいな。

今村 うん、まあな。ゆうべみっちりやったからよ。

ナレーション 今日は入試を間近に控えての大切な模擬試験なのです。

今村 伊藤、一つ約束してくれ。

伊藤 なんだ？

今村 あんな、試験の出来のことは一切言わないでほしいんだ。

伊藤 うん、分かった。

ナレーション 最初の試験が始まりました。国語は無難にこなし、苦手の数学では、やっと4問のうち2問

だけ解き終わったところで――。

荒木先生

やめ！ 鉛筆を置いて。

今村(モノローグ)

2問も解けりゃ上等。これからお得意の英語と社会で挽回さ。

ナレーション

…とひとりであなづいていた今村君のほうに、伊藤君が苦虫をかみつぶしたような顔をして近づいてきました。

伊藤

お前、どうだった？

今村

その話はしない約束だぜ。

伊藤

チェ。おれ、2問半しかできなかった。

音楽

(ショッキングな音)

ナレーション

数学の得意な伊藤君には、思ったよりできなかったのが悔しかったのでしょう。けれども、その一言は今村君の心を大きく揺さぶりました。

今村(モノローグ)

バカヤロー、バカヤロー、伊藤のバカヤロー。いったいなんてことを言ってくれたんだ。お前が2問半解けたって、おれの成績とは関係ないことは分かっている。ただ俺は無償にお前に腹が立つんだ。お前は、自分の口から出る何気ない一言の重さを知らない。その一言が、どれほど人を傷つけるか、お前はちっとも分かってやしないんだ！

ナレーション

さて、場面は変わってここは教会。今、日曜朝の礼拝が終わったところです。そうです、今村君は、2年ほど前から教会に来るようになり、クリスチャンとなっていました。高校生会スタッフの石井さんが彼に声をかけました。

石井忠雄

ねえ、今村君。先週どうしたの？ 礼拝に来てなかったみたいだけど。

今村

ご心配かけてすみません。模擬試験があつたんです。予備校ってところは本当にひどいところで、日曜日にも平気で試験するんです。

ナレーション

そこへ、女子スタッフの須内さんが――。

須内泰子

あらー。なんか大分やつれているみたい。高校生会のみみんなも心配して祈っているのよ、今村君のこと。ねえ先輩？

伊藤

うん。君のために僕らにできることと言ったら、祈ることだけだから。

今村

ありがとう、みんな。その祈りが、僕にとって何よりの励ましなんだ。

須内

ところで今村君。昨日ろくに寝てないんでしょ？

今村

どうして分かった？ おれ、そんな眠そうな顔してるかな。

須内

何言ってるのよ。礼拝中、後ろから見てたら、コックリコックリ揺れてて、あたし、もう少しで吹き出しそうになっちゃった。

今村

こりゃマイったなあ。

一同

(大笑い)

効果音

(ガヤ)

ナレーション

その午後、今村君は補講を受けるため、教会から予備校に直行しました。その日はちょうど入試直前の特別対策講義と言うことで、教室はおろか、廊下までも超満員です。席がありそうもないので帰りかけようとする、遠くのほうで呼ぶ声がします。

高橋

おーい、今村！

今村

やあやあ高橋か。すさまじいもんだな、こりゃ。満員電車さながらじゃないか。おれもう帰るよ。

高橋

お前、とことんおめでたいやつだな。今ごろの時間に来て席が空いてるとでも思ったのか？

おれなんか2時間も前に来て席取ったんだぜ。1つ余分を取ってある。来いよ。

今村

本当か?! 感謝感激雨あられ。だからお前ってやつは好きだよ。

高橋

ふん、調子のいいやつめ。それよりお前、今までどこ行ってたんだ?

今村

おれか? 教会だ。

高橋

何、教会?! 大した余裕だな。この1分1秒が惜しいって時に。それとも教会行ったら必ず受かるといご利益でもあるのか? そんだったらおれも行くさ。

今村

おれはご利益を求めて教会に行っているわけじゃない。神様を礼拝するために行くんだ。

高橋

お前はいいな、頼れるものがある。おれが頼れるのは自分だけさ。

効果音

(始業のチャイム)

高橋

(気を取り直して)そんなことはもういい。さあもう始まるぜ。

ナレーション

二人が人を押し分けかき分け通路を自分たちの席に向かってしていると――。

横山ゆずり

わたしの… わたしのコンタクトレンズが…。

ナレーション

…と、悲痛な声を出しながら床を捜している一人の女の子がいました。高橋君は見て見ぬふりをして横をすり抜け先に行ってしまう。今村君はと言えば、キョロキョロと床を見渡して――。

今村

あの一、大丈夫ですか?

ナレーション

…と一言つぶやくように言っただけで、同じようにそそくさと横をすり抜けていきました。この時、彼の心にどんな闘いがあったのでしょうか。その晩の彼の日記をのぞいてみましょう。

今村(モノローグ)

2月6日 日曜。僕は今日、一つの大きな罪を犯した。必死にコンタクトレンズを捜している女の子に向かって、「大丈夫ですか?」なんて言葉は意味がない。一緒に捜してやる心のゆとりがなかったんだ。そんな自分の姿が、今から思えば責められてならない。あの人込みの中で、あんなちっちゃな物がうまく見つかったら? もしダメだったら、あの子はどうなったんだ?

いったい、受験でなんだ? 人との競争か? 競争は勝つためにするのか?! どんなに汚いことをやっても、受かればいいのか? そんなことまでやって、そいつは人間としてノ値打ちがあるって言うんだらうか? 1点2点の差で大事な運命が決まる。人間の価値ってそんなもんか?(エコー)

――ダメだ! 僕もすっかりこの予備校の自己中心主義に毒されちゃった。僕だ。僕自身の本質が自己中心なんだ。そして、気づいた時には、神様を見失いかけている。今はもう、心には喜びも何もない。ああ神様、どうか僕の罪を赦すとおっしゃってください。僕に、信仰による喜びと平安、そして力を与えてください。

聖書の言葉

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。(ヘブル人への手紙 12:2-3)

今村

僕は知らぬ間に主イエス・キリストから目を離し、自己中心の渦に巻き込まれて、疲れ果ててしまった。…そうだ、キリストに帰ろう! 主が僕の道を備えてくださり、僕をみ心にかなう大学に導いてくださるんだ。僕がいくらひいこら焦ってみても、主のみ心でなければ僕は必ず落ちる。僕の受験を一切主にゆだねてしまおう。

- 聖書の言葉 金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましよう。」(ヘブル人への手紙 13:5-6)
- ナレーション この日から、今村君のじえ県生活は一変しました。神様に信頼し、神様にゆだねることを知った彼の心は、皆が日々殺気立っていく中で、一人喜びに満ちあふれていました。そうです、彼には神様が共にいてくださったのです。
- 音楽 (ブリッジ。明るい感じ)
- ナレーション そして、寒い冬が通り過ぎ、春のきざしが見えてきたころ、とうとう運命の試験日がやってきました。彼は、「主よ、み心を成させたまえ」と心の中で祈りながら、一つ一つ問題に取り組んでいきました。結果はどうなったかって？ ほんとはどうでもいいんです、そんなこと。でも知りたがり屋のあなたのために、現在の彼の声をちよっぴりお聞かせしましょう。
- 今村ナレーション ええ、お察しのとおり、合格発表者の中に、僕の名前はありませんでした。僕は競争に負けたんでしょうか？ 多くのものを失ったんでしょうか？ 確かにそうかもしれません。僕はその晩、一人で泣きました。でもその中で、“僕は、僕にとって一番大切なものだけは失わなかった”っていう喜びが、静かにこみ上げてきたんです。僕は今、ほかの大学の1年生として、充実した大学生活を送っています。神様がその大学に導いてくださったことを確信しながら――。

<完>